



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

待降節第1主日 C 年 (2024 年 12 月 1 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エレミヤ書 33 章 14 — 16 節

第二朗読：テサロニケの信徒への手紙一 3 章 12 節— 4 章 2 節

福音朗読：ルカによる福音書 21 章 25 — 28 節、34 — 36 節

三つの朗読から

第一朗読での「来る」(14 節) は待降節全体を、否、キリスト教全体を特徴づける表現です。「その日が来る」、「主は来る」。来る方を待ち続けるのが、キリスト教の霊性の特徴となります。

第二朗読を読むと「お互いの愛」、「すべての人への愛」のわざと、「歩む」というアクションが大切なものであることに気づかされます。「歩みを更に続けてください」(4 章 1 節) は、わたしたちへの最大の勧めの言葉です。

福音朗読の「いつも目を覚まして祈りなさい」(21 章 36 節) は、日常生活の中に来られるイエスさまを、油断せずに目を覚まして待ちわびていくという、わたしたちの生きる基本姿勢を表しています。

『ルカによる福音書』21 章 5 — 36 節は「小黙示録」と呼ばれています。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか」(7 節) という人々の問いかけに、イエスさまは誠実に答えていきます。そして「いつも目を覚まして祈りなさい」(36 節) と呼びかけて締めくくります。

ひとこと

待つという行為^{こうい}は二つの事柄^{ことがら}、あるいは二人の人がいなければ存在^{そんざい}しません。つまり、「待たせる人」と「待つ人」の関係です。

「待つ人」の気持ちに対しては、わたしたちは比較的^{ひかくてきよ}寄り添い^そやすいです。時には「何時間でも待てるわ」と言ってみたりもします。しかし、待つ時間の大切さに、本当に気がついているでしょうか？

しかし、もっと重要なのは「待たせる人」の気持ちかも知れません。どんな思いで相手を待たせているのでしょうか？ 太宰治^{だざいおさむ}の短編『走れメロス』は皆さんもご承知^{しょうち}でしょう。メロスは、まさに「待たせる人」です。「待たせる人」のこころの変化^{えが}が描かれた物語として読んでみてもおもしろいかもしれません。

「待つ人」は、自分こそが相手の気持ちをよく知っていると思っています。しかし実は、「待たせる人」の方が相手の気持ちをよく理解^{りかい}しようと努^{つと}めるのではないのでしょうか。お互いに相手のことを思いつつ、「待つ人」と「待たせる人」の間柄^{あいだがら}はさらに深いもの^{ふか}となっていくのです。

「待つ人」とは、わたしたち人類、「待たせる人」とは、父である神です。

